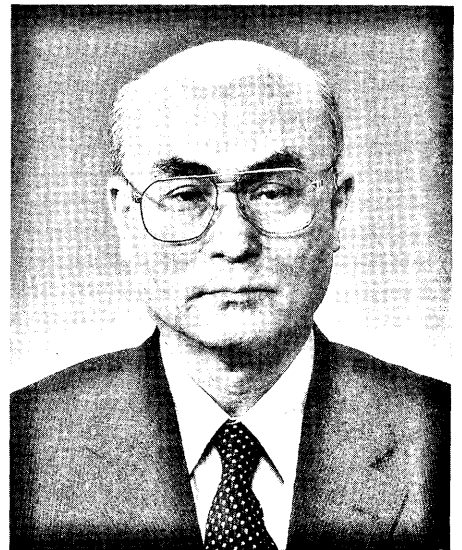


# 子どもが「問う」 学習指導の構築

上越教育大学副学長 高田喜久司



## 学習指導原 理の再構築

今、「授業力」という術語がポピュラーになりつつあり、日常の授業や学習指導のあり方、教師の指導力に熱い視線が注がれている。

元来、学習指導を有効・適切に行うためには、それなりの原理・原則に基づいて展開しなければならない。複雑多様に見える授業も、実は、基本的な原理によって展開されているのである。しかし、大学において、「学習指導の原理」の講義ほど無味乾燥なものはない。理論レベ

ルと実践レベルとの乖離が激しいからではなからうか。

従来の学習指導原理（たとえば、自発性・直観・興味の原理など）の重要性は唱えられながらも、それぞれ抽象的なレベルの記述にとどまり、ほとんど教育実践の場に生きて働く原理となり得ていないのが実情である。逆に、教育実践の場では常に論議の対象となるテーマ（たとえば、発問・教材・表現力など）が、理論的なレベルにおいて、学習指導の原理として定着し、考慮されることがほとんどないジレンマがある。

こうした現状にかんがみ、筆者の研究

たかだ・きくじ

1941年、新潟県生まれ。東京教育大学大学院修士課程修了。新潟県公立小学校、新潟大学教育学部附属小学校、信州大学教育学部を経て、1990年に上越教育大学教授。この間、上越教育大学附属小学校長、同大学学校教育研究センター長。現在、同大学副学長。専門は、教育方法学、学習指導論。

《主な著書》『学習指導の理論と実践』樹村房、『基礎・基本の徹底』（編集）教育開発研究所、『現代に生きる教育思想①アメリカ』（共著）ぎょうせい、『個性の開発と教師の力量』（共著）明治図書、『学習指導の現代的課題』（共著）学校教育研究所、ほか。

室では「理論と実践の接点」として、また生きて働く学習指導原理たり得るよう、現職経験を有する院生とともに、「問い」「自己活動」「わかる」「遊び」「興味」「経験」「表現」「感性」「教材」「風土」「イメージ」「思考力」「身体知」「ストーリー性」等々の諸概念を教育方法学的に規定し、有機的関連をもった形成史を、各自の課題意識に即してトータルに跡づける作業を行ってきた。諸文献を渉猟し、学習指導原理を再構築することによって今日的な授業のメカニズムを探るところに究極的な目的がある。

ここでは、「人間は問う存在である」(ボルノー)というテーゼを基底にしなから、学習指導原理としての「問い」について考えてみよう。

## 「問い」の意義・重要性

『明治期発問論の研究』(豊田久亀)の

労作を嚆矢として、学習指導上、「問い」の意義や重要性を指摘する論者は数多い。

まず、柴田義松は、個性教育と学び方学習にかかわって、授業では子どもにわ

からせることもさることながら、「問う」ことの指導を基本とするように、教師自身の授業観を変えていくことが大切であると、「子どもの問いをふくらます教育」の必要性を精緻に提言している。

つぎに、三枝孝弘は「自己教育力とは、常に『問う』力である」と明示した。そして大田堯は「問いと答えの間の短い授業に、「教育の危機」を見出している。さらに最近では、『自ら考える授業への変革——四つの問い』が学ぶ力をつける」(武田忠)の所論が注目されよう。

子どもの「問い」の育成は、総合学習・個性教育・学び方学習・自己教育力、「生きる力」や「自ら学び自ら考える力」の育成にとどまらず、授業観の交換、学習指導活性化の根幹として位置づけられなければならない。

わずかな先学の指摘からも判断できるように、子どもが問うことの意義や重要性は確証できるのである。

## 「問う」存在と しる子ども

子どもは元来、問う存在であるはずだ。

生まれ、新たなものを獲得し、成長し続けるプロセスにおいて、子どもは常に問いかけ、問い続けているのである。自己の存在が何であるかを問い、人間としての生き方をも問うている。

このように、子どもにとって「問う」ことは、実は「学ぶ」ことであり、ひいては生きることに通ずるものである。人間らしく生きるとは、問いを媒介にして学び続けることであるとも考えられる。

子どもは問い(問い方)を学ぶ(文字どおり「学問する」)ために通学する。しかし、今、子どもは問うことを忘れかけていると指摘されている。さらに、致命的なことは、子どもの問いを育ててやろうとしない教師の姿勢をこそ、憂慮すべきではなからうか。子どもに問いの復権をと願わずにおれない。

個性を生かすためにも、学習意欲を喚起するためにもとくに大切なことは、子ども自身の問いであることを銘記すべきである。自ら問うことができるのは、すでに学習対象に対する主体的な働きかけがおこなわれていることを意味している。そこには教師中心の伝達・注入を目

